

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770204

研究課題名(和文) 初等教育教員養成課程における外国語活動指導への自信を高めるための実践研究

研究課題名(英文) A Practical Study on Ways to Enhance Pre-service Teachers' confidence in Teaching English at Elementary Schools

研究代表者

松宮 奈賀子 (Matsumiya, Nagako)

広島大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：70342326

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、初等教育教員養成課程で学ぶ大学生が、外国語活動を担当することに対して抱いている不安を軽減し、自信を高めるために(1)外国語活動の指導に必要な英語力の育成を目指した「指導者としての英語スピーチ」(2)ALT役の外国人英語話者とのT.T.による模擬授業、の2つの方策の効果を明らかにすることを目的とした。

上記2実践の事後に参加者の外国語活動指導への不安や自信を調査した結果、2実践とも好意的に受け止められ、自信も向上したものの、指導への自信を高めるためには学級担任としての英語の話し方を学ぶだけでなく「一般的な英語力向上感」が重要であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to investigate the effect of the following two practices which targeted to enhance pre-service elementary school teachers' confidence in teaching English. (1) The effect of speech practice imaging elementary school pupils as listeners with the aim of learning the appropriate ways to speak for learners with limited English knowledge. (2) The effect of mock lessons with ALT who is the native speaker of English.

After the implementation of the above mentioned practices, the post questionnaires were conducted. From the result, it was found that both practices were regarded meaningful by students and their confidence level was improved, however not only learning how to speak to elementary school children but improving their English proficiency itself is important to enhance their confidence in teaching English. So, it is advised for teacher education to give more chance of practicing English itself along with how to use to young novice learners.

研究分野：英語教育

キーワード：小学校 外国語活動 教員養成 英語力 自信 ティーム・ティーチング 模擬授業

1. 研究開始当初の背景

小学校に新しく導入された外国語活動の円滑な指導のためには、その指導者の養成、研修が重要となる。

外国語活動では児童は初めて英語の触れることになるが、母語以外の言語を学ぶ際には「分からない」という不安が生じることが予測される。外国語活動における児童の不安に関する先行研究では、不安を強く感じている児童は人前で間違っ てしまいそうな場面等で発言を回避するなどの消極的な対応を取りがちであることが明らかになった。また、不安を強く感じている児童は、教師からの支援をより求める傾向にあることも分かり、児童の不安な気持ちに対する指導者からの適切な支援が求められることが示された(松宮, 2010, 2012)。

このような「児童の不安」に適切に対応していくためには、子どもたちが安心して学べる授業づくりが求められるが、その主たる担当者となる学級担任教員の多くも実は外国語活動の指導に不安を感じていることが明らかになっている(ベネッセ, 2007b, 2011b; 水田, 2010)。

不安を感じ、自信が持てない時、私たちはその原因となるものを避けるなどの消極的な行動をとりがちである。しかし、小学校教員が外国語活動指導を「自信がない」と避けていては、児童が安心して、楽しく学べる外国語活動を行うことは困難である。だからこそ、教員自身が指導に対して自身や有能感を持つことが、児童の学びのために非常に重要であると考えられる。

では、現職教員の感じている不安の実態とはどのようなものであろうか。先行研究からは現職教員の多くが、「自分自身の英語力(発音、流暢さを含む)」を不安、あるいは課題と感じていることが明らかになっている(西崎, 2009; ベネッセ, 2007a, 2011a)。しかしながら、英語力向上を目的とした研修は十分に実施できていない実情がある(日本生涯学習研究所, 2011a, 2011b)。また、導入への準備段階が終了し、外国語活動が全面実施された今日では、研修の機会自体が減少しているという課題もある(日本生涯学習研究所, 2012)。

このように現職教員の多くが、指導に不安を覚えながらも、十分な研修の機会を得にくい状況がある。将来の小学校教員を目指す学生たちも、現場に出た後には、自らの力で指導力を伸ばしていくことが求められる。そこで、現場に出るまでに時間的な余裕がある教員養成課程で、指導への不安を軽減できるような取り組みを行い、その取り組みを自律的に継続することで、外国語活動を率いて行けるような教員になるよう指導することが重要と考える。

小学校教員を目指す学生の外国語活動を担当することへの不安を調査したところ、最も不安なことの第1位は「自分の英語力」であり回答者の半数以上が英語力に不安を感

じていることが明らかになった。この調査の協力者である学生には、外国語活動の指導では学級担任が高い英語力を備えていることは必ずしも必須ではないことは伝えてあったが、それでも多くの学生が最も不安なこととして英語力を挙げた。この結果は、現職教員の不安の実態と通じるものである。現職教員への研修では英語力向上を目指した研修に十分な時間をとることが困難な実情があるからこそ、教員養成課程での取り組みが期待される。

また、英語力の他に多くの学生から不安の声が挙がった項目 ALT との打ち合わせやティーム・ティーチング(以後 T.T.と表記)があった。ALT との T.T.は多くの小学校で行われていることであり、T.T.への自信を高めることも重要な課題と考える。

以上のことから、小学校教員を目指す学生の「英語力」および「ALT との T.T.」への不安を軽減し、指導への自信を高める方策を検討することを重要課題として設定した。

2. 研究の目的

本研究では、初等教育教員養成課程で学ぶ大学生が、外国語活動を担当することに対して抱いている不安を軽減し、自信を高めるための2つの方策の効果を明らかにすることを目的とする。具体的には、学生の不安実態に基づき、次の2つの指導実践の効果を検証する。

- (1) 外国語活動の指導に必要な英語力の育成を目指した「指導者としての英語スピーチ」
- (2) ALT 役の外国人英語話者との T.T.による模擬授業

3. 研究の方法

(1)「外国語活動の指導に必要な英語力の育成」を目指した「指導者としての英語スピーチ」の効果検証のため、外国語活動指導に関する演習科目において4回に渡ってスピーチ練習を実施し、事後の不安および指導への自信の実態を質問紙により調査した。

本研究におけるスピーチとは単に流暢に話せればよい、というのではなく、学級担任が外国語活動において児童に話しかける場面を想定し、「児童に伝える」スピーチとなるよう話し方の工夫をするよう求めた。参加者は初等教育教員養成課程に在籍する大学2年生127名であった。

スピーチ練習は以下の手順で実施した。

スピーチシートの準備

自宅での事前課題としてスピーチシートを用意させた。原稿本文の他に、分かりやすく伝えるための工夫をメモする欄と聞き手である児童(実際には学生が児童役を担当した)とのインタラクションを通して理解状況を確認する為の質問を記入する欄を設けた。

スピーチ練習

スピーチは4人グループで行い、タブレット

端末を用いて録画した。スピーチ終了後には話し方、分かりやすさ等についてコメントがあった。グループ全員の発表後には録画した映像を全員で確認し、次回への課題を確認した。

原稿添削

スピーチ原稿は毎回回収し、英文の添削を行うとともに、ふり返りに対してコメントを行った。

上記の流れでスピーチ練習を4週連続で実施し、4回分の各参加者のスピーチ映像をDVDに入れて返却した。その映像を確認した上で、質問紙調査に回答することを求めた。

質問紙はスピーチ練習の効果についての自己評価を求める9つの質問で構成され「強くそう思う」～「全くそう思わない」の5段階で回答を求めた。その後、各項目について肯定的に評価する点と否定的に評価する点の両方を自由記述で回答させた。たとえば、「1分間スピーチは(一般的な)英語力の向上に役立った」という質問項目に対しては「具体的にはどんな点で英語力の向上に役立ったと思いますか(肯定的)」と「英語力の向上に役立たなかったと思うのはどんな点(理由)ですか(否定的)」の2つの自由記述欄を設けた。この肯定的記述と否定的記述は、5段階評定でどう評価したかに関わらず思うところがあれば、双方ともに記述するよう求めた。つまり、「役立った」の質問項目に対して「強くそう思う」を選択していたとしても、「この点は役立たなかった」と思う部分があれば、否定的な記述ができるようにした。

表1 質問項目と平均評定値

質問項目	平均値
1. 楽しかった	3.7
2. 一般的な英語力の向上に役立った	3.7
3. 学級担任としての英語力の向上に役立った	4.0
4. 自信がついた(不安が減った)	3.1
5. 負担だった(反転項目)	2.7
6. 原稿の英文訂正は役立った	4.2
7. 友達からのコメントは役立った	3.7
8. 友達のスピーチを見ること・聞くことは役立った	4.3
9. タブレットで映像をその場で確認することは役立った	4.1

ほとんどの項目において否定的回答の割合は10%以下であり、「一般的な英語力の向上に役立った」で68.0%、「学級担任としての英語力の向上に役立った」で86.1%が肯定的な回答(「強くそう思う」「そう思う」の合計)をしており、本実践は特に履修者の「学級担任としての英語力向上感」に役立ったと理解できる。また、具体的な実施方法に対しては、「原稿の英文訂正は役立った」で88.4%、「友達からのコメントは役立った」で66.9%、「友達のスピーチを見ること・聞くことは役立った」で97.5%、「タブレットで映像をそ

の場で確認することは役立った」で82.5%が肯定的に回答しており、本実践の工夫もおおむね好意的に受け止められていたこと分かる。ただし、「友達のスピーチを見ること・聞くこと」が非常に高く評価された一方で、「友達からのコメント」を役立ったと感じた学生が66.9%にとどまったことは、今後の実践の方法を考える上で注目すべき反省点と考える。

また、「自信がついた(不安が減った)」に関しては、肯定的な回答(すなわち、「強くそう思う」と「そう思う」の合計)が39.3%にとどまっており、否定的な回答も27.8%存在した。したがって全般的に1分間スピーチ練習は役立ったという評価を得たものの、必ずしも自信や不安の軽減につながったとはいえないことが明らかになった。

さらに1分間スピーチ全体について尋ねている項目1~5(表1)の評定値について相関係数を算出した。なお、肯定的な回答に偏っていたため、スピアマンの順位相関係数を使用した。興味深い結果として一般的な英語力向上と自信の間に有意な正の相関がみられ、学級担任としての英語力向上と負担感の間に有意な負の相関がみられている点が挙げられる。このことは、一般的な英語力と学級担任としての英語力を学生自身が区別していることに加え、その向上感にはそれぞれ別の要因が貢献している可能性を示唆している。相関関係から推測すると、スピーチ練習が「学級担任としての英語力」の向上に役立つものであると感じることが、負担感をあまり感じることなく取り組む上で重要といえそうである。したがって指導にあたっては、本スピーチ練習の学級担任にとっての意義が十分に理解されるよう伝えていくことが肝要と考える。反面、自信の向上にはただ単に学級担任として「どのように」英語を話したら良いかという伝え方の工夫が分かるだけでは不十分で、英語力そのものが向上していると感じることが重要と考えられる。

最後に、履修後に残る指導への不安について調査を行った。本スピーチ練習を行った演習科目の過去の履修者に行った同様の調査結果と比較した結果(χ^2 検定により選択率に年度による差があるかを検証した)、自信の英語力を最も不安と感じている学生の割合は有意に減少した。

表2 履修後に残る「最も不安なこと」(%)

	英語力	発音
2012 (N=107)	49.5	13.1
2013 (N=126)	28.6	11.1

以上の結果からスピーチ練習によって必ずしも大多数が「教壇に立って英語を話すことへの自信が向上した(不安が減った)」わけではなかったが、表2の結果から指導への

不安の最大の要因として英語力を選択する学生が 2012 年度の実践時と比較して有意に減少しており、何らかの良い影響を与えることができたのではないかと推測する。

次に本研究の 2 つ目の検討課題である(2)「ALT 役の外国人英語話者との T.T.による模擬授業」の効果を検討した。

調査協力者の所属する大学では、これまで外国語活動の指導法に関する演習科目において模擬授業を行ってきており、また複数の指導者によるティーム・ティーチングでの模擬授業を行っていた。しかしながら、学生同士で ALT 役と学級担任役を分担して行っており、実際の授業立案は共に協力して行っていた。そのため、ALT 役とはいえ、学級担任役と同じレベルで実施する授業について考え、理解しており、学級担任役が授業に詰まった時には速やかに担任を助けたり、自らの担任のように児童に指示を出したりするという現象が見られ、スムーズに授業が運ぶ一方で ALT との実際の指導で起こり得る協働の難しさを経験することができないという課題があった。そこで本研究においては 5 週間に渡っておこなう模擬授業のうち後半 3 回を ALT 役の英語母語話者(アメリカからの留学生で、アメリカでの社会人経験および日本で公立学校の英語授業に参加した経験のある学生)との模擬授業として実施した。

5 週とも、模擬授業は 45 分間で実施し、その後 30 分程度の協議の時間を設けた。後半 3 回の ALT との模擬授業においては、打合せ時間の確保が厳しい学校現場での状況を想定し、授業計画段階での ALT との協議や授業前の時間をふんだんに使った打合せは「なし」とし、模擬授業開始直前に 5 分間の打合せ時間のみを与えた。この打合せはマイクを使用し、参観学生も様子を見ることができるようにした。今回は「体験」から学ぶこと、そしてどのような学びを得るかを知ることを目的としていたため、打合せの仕方について事前に指導することは行わなかった。そのため、ALT との模擬授業の初回では、学生が英語につまり、ほとんど打合せができないまま 5 分が経過してしまっただが、その様子から学んだ 2 回目以降のグループでは英語で書かれた資料を用意する、アクティビティで使用する実際の教材を見せながら説明する、等の工夫が見られた。

なお、模擬授業に先立って、外国語活動を指導することへの不安を尋ねる自由記述調査および指導への「自信」を尋ねる質問紙調査(全 19 項目、4 件法)を実施しており、5 回の模擬授業終了後にも、事前調査において使用した「指導への自信に関する質問 19 項目(4 件法)」および、事前に収集した不安に関する自由記述から作成した「指導への不安に関する質問 12 項目(4 件法)」、さらには ALT との「授業前打合せ」および「模擬授業」からどのようなことを学んだかを尋ねる自由

記述による質問紙調査を実施した。

事前の不安を尋ねる自由記述調査において最も多くの記述が得られたのは「指導案を書けるか」に関する不安であった。外国語活動の授業を全く行っていない段階であることを考えると、ある意味当然の結果であったともいえるだろう。次に多かったのは「ALT の先生とコミュニケーションが図れるか」に関する不安であり、具体的には「ALT とコミュニケーションがとれるか」「ALT との意思疎通を上手く行えるか」など、授業以前にコミュニケーションがとれないのではないかと不安が多く挙げられていた。3 番目に多かったのは「自分自身の発音」に関する不安であり、「正しい英語の発音ができるか」「英語の発音が児童の手本となるのかどうか」など、正しく手本になるような発音ができないのではないかと不安が多く挙げられた。これらの結果からは、うまく授業を構成できるかという不安に加え、ALT とのコミュニケーションや、英語力・発音に関する不安を抱えている者が多かったといえる。この結果は、先行研究における現職教員の課題意識と通ずるものであり、これらの不安感解消への取り組みは改めて重要な課題といえると考えた。

さらに、この自由記述では、1 人の参加者が複数の不安を挙げている。そこで、本研究が焦点を当てている「ALT とのコミュニケーション」に関する記述をした者が、他にどのような不安を同時に挙げたかを調べた。その結果、ALT とのコミュニケーションに関する不安を挙げた者の 29.7%が、「自分自身の英語力」に関する不安を挙げている。また、「自分自身の発音」に関する不安を挙げた者も 22.2%いた。このように、ALT とのコミュニケーションに関する不安と同時に英語力や発音の不安を挙げた者が多かったことから推測すると、ALT とのコミュニケーションに関する不安は、英語力への不安に基づいている部分が多いと考えられる。また、ALT とのコミュニケーションに関する不安を挙げた者の 25.9%が、「指導案を書けるか」に関する不安を挙げている。指導案に関する不安は、全体で最も多く挙げられた不安であるため、同時に挙げた者が多いのは当然といえる。ただし、ALT とのコミュニケーションに不安があれば、授業をうまく進めることができないのではないかと不安を持ちやすいという可能性はあり、一部は関連していた可能性もある。すなわち、ALT とのコミュニケーションに関する不安を減少させることにより、授業を計画したり授業の流れに沿って進めたりすることに関する不安も減少させられる可能性はあると考えた。

また、事前の指導への自信に関する調査では、最も得点が低かったのが全て ALT との指導に関する事項であった。以下は自信が低かった上位 3 項目である。

1 位「ALT との打合せで、授業の概要を英語

で説明できる」

2位「ALTの話した内容が児童に伝わっていない時、どう対応すればよいか分かっている」

3位「ALTとの打合せで、ALTにして欲しいことを説明できる」

これらはALTとの連携の中でも特に英語力を要する事項や、臨機応変に英語を使用する必要がある場面についての自信が低いことが見てとれる。これらの結果から、模擬授業前の全体的な学生の状況として、ALTとの英語でのコミュニケーションに自信がなかったことがうかがえた。

模擬授業を経ての事後調査では、自信に関する全ての項目において均評定値が高くなっており、いずれの項目においても、事前事後の差は統計的に有意であった。よって、いずれの観点においても模擬授業の効果が見られたと考えられる。

事前調査で自己評価の低かった項目をみると、下位7項目のうち6項目は、「ALT」という言葉を含む項目であった。「ALT」という言葉を含む項目のうち、「ALTと一緒に会話のデモンストレーションを示すことができる」は比較的自己評価が高いが、それ以外の6項目についてはいずれも、自己評価の低い項目であったということになる。そして、「ALTとの打ち合わせで、授業の概要を英語で説明できる」「ALTの話した内容が児童に伝わっていない時、どう対応すればよいか分かっている」「ALTとの打ち合わせで、ALTにして欲しいことを説明できる」「授業中、ALTに指示を出すことができる」の4項目については、事後調査において得点は上昇したものの3.0未満にとどまっており、他の項目に比べて自信が低いという結果であった。

一方、児童に対して英語での指示を与えることに関する項目については、逆に、事前・事後とも得点が高かったといえる。具体的には、「授業の始まりのあいさつを英語でできる」「曜日、日付、天気の確認を英語でできる」「児童に英語で指示を出すことができる」といった項目である。これらの項目は、授業中に児童に対して英語で話すことができるかを問う項目であったため、児童に対して使う英語に関しては、学生の自信は比較的高いといえるだろう。

また、ALTとの模擬授業を実際に授業者として体験した学生と、参観のみであった学生とで自己評価に差があるかを検討したが、ほとんどすべての項目において両群に差は見られなかった。このことから、実際に模擬授業を行わなくとも、参観(児童役として参加)することを通して授業者と同様の学びを得ることができるかと推察される。

4. 研究成果

本研究の結果から、(1) 外国語活動の指導に必要な英語力の育成を目指した「指導者としての英語スピーチ」および(2) ALT役の外

国人英語話者とのT.T.による模擬授業のいずれも学生の自信向上に一定の効果があることが示された。特にALTとの模擬授業については、実際に日本語を話さないALT(今回はALT役の留学生であった)とのT.T.体験を通さないと気づけなかったことがあったとの記述が多く得られ、履修者だけの模擬授業では得られない学びであったといえると考えられる。具体的には、多くの学生が「授業中にALTが手持無沙汰な様子であった」ことに関する記述を挙げていた。これは学生同士が2人の指導者役を行う場合にはなかなか発生しない状況であり、本体験によって、十分な役割の検討や打合せでの共通理解がないと、ALTが授業中に役割を見失い、手持無沙汰になってしまうことが具体的なイメージをもって理解されたと考える。

ALTとのT.T.への不安には、協働場面において求められる英語力が関わっていると考えられ、またスピーチ練習の調査から明らかになったように自信向上には「どのような話し方をしたら児童に伝わるか」の方法が分かるだけでなく「一般的な英語力向上」が必要であることが本研究から明らかになった。よって、これからの教員養成において、学級担任としての指導技術やTeacher Talkの在り方を学ぶことに加えて、英語力そのものの底上げも学生の指導への不安解消にとっては重要な課題と捉え、養成課程での指導に反映させていきたいと考える。

<引用文献>

- 西崎有多子(2009)「小学校外国語活動(英語活動)」における指導者の現状と課題～学級担任が単独で行う授業に向けて～」『東邦学誌』第38巻第1号, pp.53-71
- 日本生涯学習総合研究所(2011a)「小学校の外国語活動に関する現状調査 <小学校対象> 調査報告」
http://www.shogai-soken.or.jp/htmltop/toppage.files/syou_2010_02.pdf
- 日本生涯学習総合研究所(2011b)「公立小学校の外国語活動に関する現状調査 <教育委員会対象> 調査報告」
http://www.shogai-soken.or.jp/htmltop/toppage.files/kyou_2010_02.pdf
- 日本生涯学習総合研究所(2012)「小学校の外国語活動に関する現状調査 <小学校対象> 調査報告」
http://www.shogai-soken.or.jp/htmltop/toppage.files/syou_2011.pdf
- ベネッセ教育開発センター(2007a)「第1回小学校英語に関する基本調査(教員調査)第1章第3節 研修」
http://benesse.jp/berd/center/open/report/syo_eigo/2006/pdf/data_09.pdf
- ベネッセ教育開発センター(2007b)「第1回小学校英語に関する基本調査(教員調査)第1章第4節 英語教育の現状と課題」

- http://benesse.jp/berd/center/open/report/sy
o_eigo/2006/pdf/data_10.pdf
ベネッセ教育研究開発センター(2011a)「第
2回小学校英語に関する基本調査(教員
調査)第2部おもな調査結果」
http://benesse.jp/berd/center/open/report/sy
o_eigo/2010/pdf/data_05.pdf
ベネッセ教育研究開発センター(2011b)「第
2回小学校英語に関する基本調査(教員
調査)第3部テーマ別分析」
http://benesse.jp/berd/center/open/report/sy
o_eigo/2010/pdf/data_06.pdf
松宮奈賀子(2010)「小学校教員を目指す学
生の「外国語(英語)活動に関する演習
科目」履修がもたらす学生の変容」『ク
オリティ・エデュケーション』第3号,
pp.111-134
松宮奈賀子(2012)「小学校外国語活動にお
ける児童の「不安」に関する課題と支援
のあり方」、『広島大学大学院教育学研究
科紀要第一部(学習開発関連領域)』,第
61号, pp.107-114
水田時男・浅井憲一・越川昌信・長谷川宏・
難波宏司・稲次一彦・行本健一・早瀬幸
二・高橋信之・三原智雄(2010)。「小学
校外国語活動」における教員の指導力向
上に関する研究(中間報告)-教員の意
識調査にもとづいた指導力向上プロ
グラムの開発-」『兵庫県立教育研修所
平成21年度研究紀要』第120集,71-82.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

松宮奈賀子・森田愛子「小学校教員養成課程
における「学級担任としての英語力」育成の
ためのスピーチ練習の効果」、『小学校英語教
育学会誌 JES Journal』, Vol.15, pp.95-110,
2015年, 査読有

松宮奈賀子・森田愛子「小学校教員養成課程
に学ぶ大学生の外国語活動指導者イメージ
-「外国語活動指導法」での指導内容を検討
するために-」、『日本教科教育学会誌』,第
38巻,第2号, pp.81-90, 2015年, 査読有

松宮奈賀子・森田愛子「教員志望学生の英語
指導への自信を高める模擬授業:ALTとのテ
ィーム。ティーチングに焦点をあてて」、『小
学校英語教育学会誌 JES Journal』, Vol.15,
pp.95-110, 2015年, 査読有

松宮奈賀子「外国語活動指導への不安軽減策
として教員養成課程に期待される「外国語活
動指導のための英語力」育成」、『日本教科教
育学会誌』,第36巻,第1号, pp.55-64, 2013
年, 査読有

松宮奈賀子「外国語活動の指導に求められる
英語運用能力向上のための試み - 英語ス

ピーチ練習の可能性-」、『広島大学大学院教
育学研究科紀要第一部(学習開発関連領域)』,
第62号, pp.81-88, 2013年, 査読無

〔学会発表〕(計5件)

松宮奈賀子「小学校英語の指導者に求められ
る英語力とは」千葉大学英语教育セミナー,
2016年3月20日, 千葉大学

本田勝久・粕谷恭子・建内高昭・松宮奈賀子
「Pre-service Teacher Training Standards for
Primary English Education in Japan」第10回東
アジア教員養成国際シンポジウム, 2015年
10月31日, 名古屋国際センター

松宮奈賀子・森田愛子「教員志望学生の英語
指導への自信を高める模擬授業:ALTとのテ
ィーム。ティーチングに焦点をあてて」小学
校英語教育学会広島大会, 2015年7月26日,
広島大学

松宮奈賀子「グローバル化時代を生きる子ども
と英語教育」安田女子大学児童教育学会第
25回研究大会(招待講演), 2015年6月13
日, 安田女子大学

松宮奈賀子・森田愛子「学級担任に求められ
る英語力育成のための試み-英語スピーチ
練習の可能性を探る-」小学校英語教育学会
神奈川大会, 2014年7月27日, 関東学院大
学

〔図書〕(計2件)

鈴木由美子編著, 他13名(松宮奈賀子, 11
番目(担当章順), 第12章「外国語活動の
教育課程」, pp.189-210), 『教師教育講座第6
巻 教育課程論』, 協同出版, 2014年

樋口忠彦・加賀田哲也・泉恵美子・衣笠知
子編著, 他7名(松宮奈賀子, 11番目, 第
9章「指導方法と指導技術」, pp.111-125),
『小学校英語教育法入門』, 研究社, 2013年

6. 研究組織

(1)研究代表者

松宮 奈賀子 (MATSUMIYA NAGAKO)
広島大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号: 70342326